●トピック

万弘寺の市

平成８年５月18日、午前３時頃から未明にかけて、大分市坂ノ市で「万弘寺の市」が開かれました。

「万弘寺の市」は、万弘寺の伽藍の開眼の日を由来とする古い祭礼市だと伝えられていますが、火災などによって過去の記録が消失しており、詳しい事はわかっていません。

市は坂ノ市駅前から万弘寺へ行く道の両脇で行われていたそうですが、現在はテント張りの会場で行われています。坂ノ市の農村の男衆（男性）と佐賀関町の漁村の女衆（女性）が集い、「かえんかえ」と声をかけながら、各々持ち寄った農作物や海産物などを交換するのが伝統的な形式です。これらの交換は品質の確認が難しい暗闇の中で行われる為、しっかり交渉しないと割の合わない取引になってしまいます。そこで、相手の商品をけなしあいながら交渉していたそうです。それでも明るくなればだまされていることもあり、この市の別名「だまし市」は、そのあたりに由来しているようです。

近年の市は観光化が進み、会場の一部では照明も灯され、そのような駆け引きの形も変わってきているようです。それでも、参加した中学生や主婦らからは盛んに歓声が上がり、食料品や日用雑貨のほか、カセットやＣＤ、書籍など思い思いの品を交換している光景が見られました。

交換される農作物の一例

ＣＤなど交換する

●行事案内

テーマ展示

■第２回　大分ゆかりの人物展

期　間　７月６日(土)～９月29日(日)

内　容　松平忠直・後藤碩田・滝廉太郎といった大分にかかわり深い人物の遺品や関係資料を展示し、その足跡を紹介します。

各種講座

■ふるさと歴史再発見「考古のコース」

期　間　７～９月の第１・２・３土曜日

対　象　高校生以上

内　容　「最近の考古学の調査成果から」と題し、大分県下の事例を中心に考古学の世界に触れていただきます。

●編集後記

柞原宮実測や万弘寺の市観察調査など、「いい仕事ですね、研究できて」などと言われそうですが、年度初めは人事異動や雑務処理など事務仕事も目白押しです。ちょっと調査している間に、スケジュールは迫ります。まさに自転車操業。館員それぞれに仕事を抱えていて、ニュース発行の仕事をすっかり忘れていました。危なかった。

資料館ニュース　No.35
発行　1996.6.30
大分市歴史資料館
大分市大字国分960番地の1
〒870 ☎（0975）49－0880

大分市
歴史資料館ニュース
OITA CITY MUSEUM NEWS

花樹鳥文蒔絵螺鈿洋箪笥

35
1996.6.30

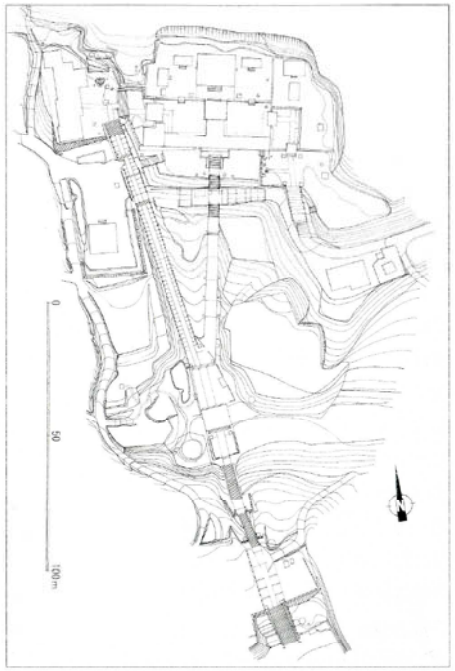
調査情報

柞原八幡宮境内の測量調査

大分市歴史資料館では平成３年から柞原八幡宮の総合調査を実施しています。平成７年度の調査は本殿横にある土蔵に収蔵されている宝物の調査と、境内の建物と地形の測量を行ないました。

柞原八幡宮境内は、南北230ｍ、東西130ｍで高低差は50ｍもある起伏に富んだ、南斜面の地形を利用して造営されています。これまで、境内の図面は江戸時代の宝永年間（18世紀初頭）・安政年間（19世紀中頃）・明治・大正時代など数回作成されています。江戸時代の図面には、多宝塔・経蔵・弥勒堂・阿弥陀堂など、今日境内で見ることのできない神仏習合の時代の建物が描かれています。

今回の測量は、境内の建物や石造物などの位置や地形を500分の１の平面図面にとり、１ｍ間隔の等高線を加えたものです。明治・大正時代に作られた図面は、地籍図とそれを元にした見取り図であり、地形のようすを詳しく知ることはできません。こうした中で今回作成した測量図は、どれよりも正確で、柞原八幡宮研究の基礎資料となるものと考えています。



柞原八幡宮内の測量図

●表紙紹介

花樹鳥文蒔絵螺鈿洋簞笥

前倒れ式の蓋がついた西洋式のタンス。蓋を開けると大小７つの引き出しとなっています。全体に花と樹木が金蒔絵や貝殻を張り込む螺鈿技法を用いて描かれ、周囲は螺鈿で幾何学文様が施されています。また、天板と蓋の前面には鳥もいます。このような文様の漆器は一般に南蛮漆器と呼ばれ、本資料のようなタンスからドーム形の櫃、書見台など様々なタイプがあります。これらは16世紀末から17世紀初めにヨーロッパ人の注文で大量に作られそのほとんどが輸出されていました。その隆盛ぶりから英語のジャパンは日本と同時に漆器を意味しています。

天板部分

テーマ展

新収蔵品展

期間　平成8年4月27日～6月23日

本年度第１回目のテーマ展示として「新収蔵品展」を開催しました。本展では、資料館がここ２、３年の間に収集した資料の中から、特に歴史的に貴重と思われるものや、内容的に興味深いものを選んで展示しました。

今回展示した品は、①幕末に現大分市木田名辺山谷から出土した青銅器の一つとみられる弥生時代の中広銅矛、②蝋燭の原料となる漆の実の調達を命じた20代大友義鑑の書状や21代大友義鎮（宗麟）および22代大友義統の感状、③江戸時代に大友氏の戦国時代の城下町を検証して描かれた「元府内之図」、④ザビエルの東洋における伝道について最初に紹介した本として知られるトルセリーニ著『東洋の使徒フランシスコ・ザビエルの生涯』（1597年版）、⑤桃山時代に日本からヨーロッパへ輸出された南蛮漆器の一種「花樹鳥文蒔絵螺鈿洋簞笥」、⑥享保２年（1717）幕府領の南石垣・中石垣・北石垣三ケ村と豊後森藩領鶴見村（ともに現別府市）との秣場争論の裁許請証文と同絵図、⑦天明３年（1783）九州を旅した古川古松軒の紀行文『西遊雑記』（写本）と同じく古松軒が天明８年に東北地方から蝦夷地を視察したときの紀行文である『東遊雑記』（写本）、⑧熊本藩の儒学者として豊後鶴崎詰藩士子弟の教育にあたった脇蘭室（1764～1814）直筆の「記事」や蔵書目録、⑨嘉永５年（1852）別府在住の日名子豊清らによって出版された筑紫西国三十三所の観音霊場の案内書である『西國順禮獨案内』、⑩杉田玄白や中津藩藩医前野良沢らが４年余の歳月をかけて翻訳・出版した日本最初の本格的な西洋解剖書として知られる『解体新書』（安永３・1774年初版本）、⑪豊後高田生まれの本草学者賀来飛霞（1816～1894）の植物写生図や「救荒植物集説」などの30点余。その他、イエズス会の宣教師たちがミサ曲の伴奏や豊臣秀吉の御前で天正遣欧少年使節らによって演奏されたといわれる西洋古楽器の複製品等を展示しました。

中広銅矛

『東洋の使徒フランシスコ・ザビエルの生涯』

大友義鑑書状

賀来飛霞植物図

西洋古楽の調べ

教会から流れてくる聖歌の調べ。キリスト教の各種儀式には必ず音楽が伴っています。西洋音楽もキリスト教とともに日本に伝わりました。1551年ザビエルは山口の大名大内義隆と面会した際、クラヴォ（小型の鍵盤楽器）と思われる楽器を献上しています。また、同年9月、ザビエルが豊後府内の大友宗麟を訪問した時には、港に入港していたポルトガル船の船員がシャラメラとフラウタ（フルート）を演奏して、大友館まで行進したといいます。

その後府内教会では、聖歌隊が組織され、宣教師が15名の少年たちに声楽とヴィオラ・ダルコ（弓で弾く弦楽器の意味）の演奏を教えています。彼らが奏でる楽器と歌声が町のそこかしこで聞こえたことでしょう。楽器演奏で特筆すべきは4名の天正遣欧少年使節です。彼らは有馬のコレジオで演奏法を習い、ヨーロッパ各地でその腕前を披露しています。そして、帰国後、天下人豊臣秀吉の御前でクラヴォ、アルパ、ラウデ、ヴィオラ・デ・アルコ、レアレージョを演奏し、秀吉はたいそう気に入り、3回もアンコールしたそうです。

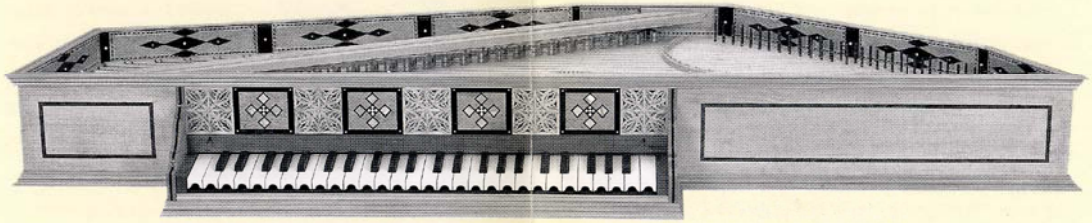
昨年度、資料館では、これら16世紀後半に日本にもたらされた西洋の楽器を可能なかぎり忠実に復元しました。秀吉や宗麟を初め、府内の人々が聞いた音色が、400年の時空を越えて、現代によみがえりました。

①フィーデル

バイオリンに似ているが弦の数や胴体の構造が異なっている。演奏も、顎と肩で挟むのでなく、腕にのせて弾く。府内の少年たちに教えられたヴィオラ・ダルコ、少年使節が弾いたヴィオラ・デ・アルコもこのタイプの楽器だったと思われる。

④ルネッサンス・ハープ

少年使節が弾いたアルパとはハープのことで、このタイプと思われる。



⑥チェンバロ

ピアノのように弦を打つのではなく、はじいて音を出す鍵盤楽器。少年使節が演奏したクラヴォはこのチェンバロと思われる。それは、スペイン・アラルカのコロンナ卿から贈られた、イタリア製で真珠をちりばめ象嵌（ぞうがん）を施した豪華品だったという。そのため、復元にあたっては、イタリアタイプの不定形をした小型のスピネットをモデルとし、記録どおりの装飾を施した。

②ヴィオラ・ダ・ガンバ

脚の弦楽器という意味で、演奏する際両足で挟むためこの名がついた。チェロに似ているが、弦の数や指で押さえる場所を示すフレットがあるなど別種。日本にもたらされた確証はないが、16世紀後半を代表する西洋古楽器のため製作した。

③リュート

少年使節が秀吉の御前で弾いたラウデはこのリュートのこと。

洋楽伝来史略年表

年代	事　　項
1543	ポルトガル人種子島漂着（鉄砲伝来）
1549	ザビエル来日（キリスト教伝来）
1551	2月、ザビエル、大友義隆に楽器（クラヴォ？）を献上。 9月、ザビエル、大友宗麟訪問の際、シャラメラとフラウタの演奏で行進した。
1552	山口の教会で歌ミサが実施される。
1557	府内の教会では聖歌隊が組織されていた
1561	府内教会で、15名の少年に声楽とヴィオラ・ダルコ（弓で弾く弦楽器）の演奏が教えられる。
1562	府内教会において大友宗麟を招いた晩餐会で、少年たちがヴィオラ・ダルコを演奏。 このころから、平戸・ロノ津など各地の教会でも少年少女聖歌隊が組織される。
1578	宗麟、キリスト教徒となる。洗礼名フランシスコ。
1580	安土、有馬のセミナリオで本格的な音楽教育が実施される。 安土のセミナリオと日杵教会にオルガンが設置される。
1582	天正遣欧少年使節、長崎から出発。
1585	少年使節、ローマ法王に謁見。
1587	豊臣秀吉、バテレン追放令を出す。
1590	少年使節、帰国
1591	少年使節、秀吉の御前で西洋楽器を演奏
1600	関ヶ原の戦い。天草でオルガンが製作される。
1605	長崎で、グレゴリオ聖歌楽譜を含む「サカラメンタ概要」が出版される。

⑤ルネッサンス笛

府内城(6) 府内城の名称

これまでに5回にわたって府内城について述べてきました。まだお話したい事がありますが、一応今回で終りにしたいと思います。

さて、皆さんは府内城に北原白秋の歌碑のあるのをご存じでしょうか？歌碑は城址公園の東側広場の、もと帯曲輪近くに立っています。

白雉城
お濠の蓮乃　ほの紅き
朝眼よろしも　妻のふるさと
白秋

白秋の夫人が大分市千代町の出身だという事で、府内城内に建立されたといわれます。

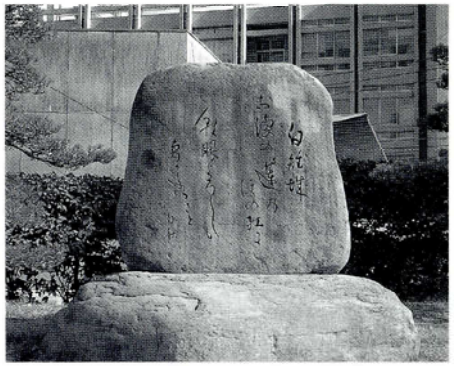
現在の堀には蓮の花は見られませんが、昔の写真を見ますと蓮が植えられています。

歌われている“白雉城”は、豊後府内城の別名として知られています。府内城は、福原直高が大分川河口の荷落の地に築城したものですが、城の完成にあたって縁起をかついで荷揚城と名付けたといわれます。しかし、竹中氏が旧府内の町を城下に移して以降、日根野、大給松平氏を通して“府内城”と呼ばれており、地元では府内城として親しまれています。地元以外の人達が大分城と呼ぶことがありますが、ご存じの様に大分は明治以降に付けられた地名で(郡名としてはありますが)、江戸時代には大分城と呼ばれることはありませんでした。したがって、府内城を大分城と呼ぶのは適当ではありません。

府内城は、百雉城または白雉城とも呼ばれていましたが、名称の由来については確かな事は分かりません。百雉は城域をいう言葉で、“方丈＝堵、三堵＝雉、一雉＝長さ三丈、高さ一丈”の関係にあり、百雉＝300丈＝501間＝8町21間となります。前に述べたように、中世の城は方八町という思想があったらしく、福原直高は府内城を方八町に縄張したとされています。“左博 隱公元年「都城過百雉國害地」”“史記 仲尼出家「臣無藏甲、大夫毋百雉之城」”という思想から、侯伯でない者の城は百雉以下の方八町であるといわれたのかも知れません。百雉はおよそ方八町といえ、そのために百雉城と別称された可能性があります。

さて、白雉城ですが、百雉であまりに雅美に乏しいからとか、漆喰白壁の城であるので白い雉に擬したともいわれていますがはっきりしません。天保年間の詩句に“白雉城云々”とあることから始まったともいわれます。いずれにしても寛保大火以前の府内城の白壁土塀と白亜の天守閣がそびえていた姿をさした美称であったのでしょうか？

最後に、第1回でふれた西之丸廊下橋について補足しておきます。正保絵図では、屋根は入母屋、描き方からすると檜皮葺、支脚は3本組柱で橋を支えており、寛保絵図は、おそらく切妻・檜皮葺で、支脚は3本組柱です。ところが、明和7年から安政5年の絵図では切妻・瓦葺で、支脚は3本組柱となっています。発掘の結果、堀に打ち込まれた3本組の木柱を検出し、その間隔から6ヶ所の支脚が推定されます。以上の事は、支脚柱は同じですが、時代によって屋根の形が異なる事を示しています。



府内城内の北原白秋の歌碑

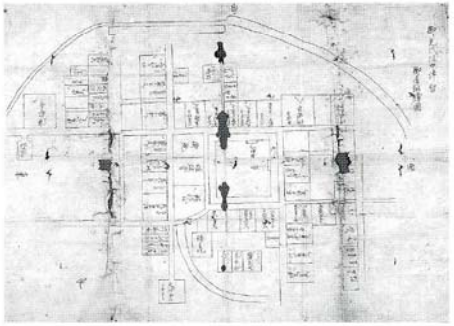
故立川輝信氏旧蔵資料

3月27日に元小学校長で大分県郷土史研究家として著名な故立川輝信氏が所蔵されていた資料16件と大分県郷土史関係図書約900冊が故立川氏の遺志としてご遺族の野尻武敏氏から寄贈されました。

寄贈された資料は下記の目録のとおりです。まず注目できるのは戦国時代府内町絵図2点です。同種の絵図は写真資料で6種類が知られていますが、現在所在が確認できる江戸時代製作の絵図は1点のみでした。それが今回2点も確認できたのですから、それだけでも大変な発見です。さらに、番号1の絵図には府内城本丸にあった原図を文政12年（1829）に牧在氏が写したとの書込があります。本図が牧在氏の写図そのものかどうかははっきりしませんが、6種類の同図の中で唯一成立年代が分かる貴重な例です。また、松平忠昭中津留屋敷絵図（3）は、大給松平忠昭が府内藩主となる以前に（1836年頃）一時館を構えた中津留付近（現大分市今津留）を描いています。館を中心に家臣の屋敷、寺院が配置されており、その名前と知行高が注記されています。本図は府内藩主以前の大給松平氏の歴史を知る上で貴重な資料と言えます。

故立川氏が収集されたこれらの資料、郷土史関係図書は、現在入手困難な貴重なものばかりで、今後展示や研究に役立てていきたいと思っています。

1　戦国時代府内町絵図



3　松平忠昭中津留屋敷絵図

寄贈資料目録

番号	資料名	時代	形態	大きさ(縦×横)	番号	資料名	時代	形態	大きさ(縦×横)
1	戦国時代府内町絵図	(1829年)	紙本着色	137.9×139.9cm	10	長崎絵図	江戸時代	木版単色	35.5× 45.4cm
2	戦国時代府内町絵図	江戸時代	紙本着色	122.0×105.0cm	11	江戸細見絵図	1864年	木版単色	72.5× 89.7cm
3	松平忠昭中津留屋敷絵図	江戸時代	紙本墨書	58.5× 79.3cm	12	大分県管内全図	1898年	印刷	97.0× 77.3cm
4	大分郡原村絵図	1725年	紙本着色	74.6× 95.5cm	13	石城川村西部地図	明治時代	紙本着色	38.0× 47.5cm
5	大分郡原村絵図	1745年頃	紙本着色	45.0× 85.0cm	14	府内城下町絵図	明治時代	印刷	35.0× 37.5cm
6	大分郡原村絵図断簡	江戸時代	紙本着色	28.0× 37.2cm	15	中外産業博覧会各館配置図	1928年	印刷	39.0× 54.5cm
7	豊後国絵図	1842年	木版単色	94.6× 73.5cm	16	大分町地図	1880年	紙本着色	53.0× 79.0cm
8	国郡全図　下巻	1837年	木版多色	28.6× 18.6cm	17	大分県郷土史関係図書	明治時代～昭和40年代		900冊
9	上総国輿地全図	江戸時代	木版多色	74.0×119.0cm					